

風土の象徴「ハスカップ」の保全をめぐる試論

～ 苫東プロジェクトとハスカップ・サンクチュアリ～

2012/12/31

NPO 法人苫東環境コモンズ

事務局長 草 苺 健



1. はじめに

このレポートは、平成 22 年（2010 年）2 月 24 日の夕方、苫小牧ハスカップ研究会の求めに応じ、苫小牧東部開発(株)が昭和 50 年代当初からどのようにハスカップ¹の保全と移植に取り組み、かつ地域資源活用とブランド化に取り組んできたかを関係者に説明するために作った、自らの資料を元にしたものである。極めて残念なことに、苫東破綻の整理のさなかに、ハスカップに関して進められてきた調査研究と移植保全、そしてそれらの経過を示すすべての資料は失われてしまって今は見るべきものがなにもなくなり痕跡すらないが、これは、一部の関係者の無頓着さはもとより、地域のハスカップへの継続的な関心の乏しさなどまで如実に示すものだと思っていた。しかし今はハスカップには親身になってくれる本当の後見人がどうもいないのが最大の理由だと考えるようになった。ハスカップこそは、勇払原野の夏の風物詩という時代の寵児のような名声と、開発の壁になる問題児との間を行ったりきたりしてきたシンボルでもあったと言える。

さて、研究会当日は、レジメを元にして、植生調査、アセス、移植、地域分譲、栽培研究、パッケージとデザインのそれぞれに直接関与した草苺²が、約一時間ほど講演した。この試論は、当時を知る研究者も、研究成果も不在になりつつある現在、経過を正確にとどめておく必要もあろうと考え、概数を用いることをお許しいただきながら、講演内容を思い出しつつ、周辺エピソードも新たに足して、活字にしておくことにしたものである。

¹ ハスカップ；この呼び名で呼ぶ漿果樹には、和名のクロミノウグイスカグラとケヨノミがあり、それを総称している。以下、ハスカップという。

² 草苺；草苺健。北大農学部を卒業後、昭和 51 年苫東(株)に入社、苫小牧事業本部環境部に勤務し、緩衝緑地造成のための植栽試験、環境調査などに従事。いすゞ自動車用地の開発に伴う環境アセスメントに基づき、ハスカップの樹木実態調査、移植保存、地域保存から子会社のハスカップ事業を支援して地域ブランドづくりに参画。平成 10 年に退職後は、ボランティアとして雑木林の保育を継続し、平成 22 年 1 月に NPO を設立。

2. 旧苦東会社のハスカップ対応と保全策

ハスカップ原野は燃える

やや思い出話から始めると、わたしが大学を卒業して一年間研究生として過ごしている間に、指導してくれていたM教授が、「君にぴったりの就職口だ」と紹介されたのが、苦東工業基地の緩衝緑地づくりという仕事だった。造林学を学び、山登りのクラブ活動を続け、卒業論文では、冬の道内の山々を跋涉した経験から天然林の形を森林美学の観点でモデルを示したことが、M教授をして「ぴったり」と言わせたのかと思う。そうして極度の就職難の世相を受けて右も左もわからないまま務めた苦小牧だった。当然ながらというべきか、個人的にはハスカップのことは全く知らなかった。苦小牧といえば、高校2年の3月、1年後は北海道大学を受験しようと、ヒッチハイクで札幌へ下見に行く途路の3日目の朝、トラックに下されたのが何となく今の日本軽金属前の広い通りだった。そこで乗り継いで札幌に向かった記憶がある。それが初めての苦小牧、勇払原野だった。さびしいあっけらかんとした異様な印象が残っている。

さらに、北大苦小牧演習林での学生実習でも苦小牧に来たが、演習林にほぼ缶詰状態だった。そして研究生時代、I先生の調査の助手として阿寒湖に向かう際に通ったのが、風景としてみる初めての勇払原野だった。当時は造林学でしばしば対象にする樹木ですら名前がおぼつかなかったから、ヨシの原野にバランスよく散生する樹木がわからなかった。

「先生、あのカッコイイ樹木はなんですか？」

「ヤチハン。ヤチハンノキ³だよ。」

これがハスカップとの唯一のニアミスだった。

昭和51年4月、苦小牧東部開発(株)に入社してからは、土地勘をつけるために時間を見つけては平らな原野のようなフィールドを歩き来したが、入社その年の7月頃、社内無線で「山火事発生、消火準備態勢に入るように」という連絡が来た。そのころまで、ハスカップという地域独特の奨果樹があることは知っていたが、市民とのかかわりは実感がなかった。原野に自生するハスカップの実を採りにきた市民が投げ捨てるタバコの火で、原野の湿原がなぜか燃えるらしい。これはとても不思議であったが数年たってから自ら実験してみた。なぜ土がモグサのように燃えるのか。

理由は簡単だった。泥炭がむき出しになっているのである。湿原のかなっけに染まって赤くむき出しの粉のようなもの、あれはしばしば泥炭だったのだ。赤い泥炭の上に火のついたタバコを載せて団扇で扇ぐと、モグサのように火がつくのである。なぜ、これが繰り返すのか。その応えも簡単で、市民が、モグサのような泥炭がむき出しになっていることを知らないのである。消防の防火協議会でこのことを指摘したが、消防はなんだかんだ言ってこのキャンペーンのアイデアをまともに受けなかった。いったん火事になればモグサ状だから1週間もいぶり続け、あるとき風でも起きれば再び炎を上げる。毎年のように繰り返す山火事で、まさか土地所有者として放置もできず、職員は他の仕事をなげうち、こ

³ ヤチハンノキ；湿原に生息する中低木。勇払原野では樹高5mほどになる。ヨシ湿原が乾燥してくると出てくる。ハスカップの群落も放置すると、ヤチハンノキ・ホザキシモツケ群落などに変わる。現在のハスカップ採取地もいずれヤチハンノキ林に遷移する可能性が大で、すでにそれは始まっている。ハスカップはそのままでは消滅する。

の原野火災とつきあった。水の入ったジェットシューターを背負い、くたくたの消火も実はあまり効果はなく、最も威力のあるのは、火の気のありそうな場所の周囲をブルドーザーでわさわさと乱暴にただ「地はぎ」するのである。根本的な消火方法はこれしかなかった。だから山火事の跡地は荒れた原野がさらに荒地のように見えた。航空写真で見れば、苫東には楕円形のトラックのようなものが見えたものだが、それはすべて消火跡地である。

移植のはじまりは地域資源活用と「ミチゲーション」

さて、この勇払原野の風物詩であるハスカップはなぜ移植や栽培がなされるようになったのか。理由は、ふたつある。一つは、地域ブランドづくりである。ハスカップという地域特有のベリーが工業基地に大量にあることは、関連子会社（苫小牧興発）の業務として地域貢献できると判断した当時の苫小牧事業本部長（道庁出身のA氏）が、苫東会社の植樹会の付帯工事として、昭和48年頃から毎年500～600本のハスカップを移植保存してきた。これらはつた森山林内と周辺の空地に年度を分けて移植され、管理されてきた（これは上司とわたしがフォローしてきた）。これらは後述するように、ハスカップジャムとハスカップワイン、それとお菓子の原料として販売ルートにのって苫東固有の地域資源を活用した産品として小さなビジネスになったのである。

ハスカップが移植されるようになったもう一つの理由は、貴重種の保全である。苫東D地区へのいすゞ自動車の工場進出とそれに伴う開発行為申請だった。ハスカップは、環境庁（当時）の「貴重植物」に指定されており、工業用地を造成するために手続き上必要な環境アセスメントを行う際に、貴重植物の「保全の措置」を明記しなければいけない。つまりアセスを通すためには移植して保全しなければならない、それが発端であった。自生地が極めて限られるハスカップの宿命であろうが、この保全措置としては、

自生地の保全

苫東基地内の移植保存

自生する自治体および隣接する自治体への移植

- ・住民への分譲
- ・企業、学校、団体への分譲

全道の農協への分譲

があり、環境アセスメントを所管する道庁の担当部局とはこの方法で保全措置として見なすという了解を得た。ちなみに、ハスカップは立地が偏っているため、苫東の保全緑地の湿原では十分に担保できないので、苫東の公園緑地予定地への移植、苫東基地では移植しきれない分を「里子」に出すものである。最近の言葉で言えばミチゲーション⁴（影響の緩和策）である。ミチゲーションには回避、縮小、回復・再生・修復、軽減、代替などの方法がある。保全緑地は影響を回避して永久に残そうとするものであり、代替は地域内の再生に相当する。縮小はさらに広域の栽培という形態での保全にあたる。

⁴ ミチゲーション：開発を行う場合、環境への影響を最小限に抑えるために、代替となる処置を行うこと。回避、最小化、修正、軽減、代替の5つの原則があるとされる。

移植が大々的なプロジェクトになった最大の契機は、いすゞ自動車の苫東立地である。D地区という自動車関連用地 150ha ほどの用地分譲にあたって、苫東では、現在の高規格道路の北側のE地区で、湿地を埋め立てる土砂を採りながらD地区に運び、切り盛りによって同時に二つの地区の開発行為を完了させるのが特徴である。ハスカップの多くは、D地区に多かった。多いとは言ってもそれは太古からの手付かずの湿原や原野ばかりではなく、苫東プロジェクトが始まる以前に、すでに宅地開発されたところが最も多かった。実際に、宅地分譲が行われたあとに北海道企業局が買収した土地には、ハスカップが自生する原野状態であり、辛うじて排水路と格子状に区画路があり、宅地ごとに番号や購入者の名前の書かれたプレートも埋められていた。そのあたりが市民が最も入り込みやすいハスカップフィールドであった。

ハスカップの実態調査

苫東の「10年のあゆみ」の年表によると、いすゞ自動車の立地に伴うD地区第1次開発事業の工事アセスメントの確定告示は56年2月なので、環境アセスメントは55年に作成と協議を終えていたはずだから、あらかじめ実施したハスカップ自生地箇所と本数を調べた実態調査は54年頃に行われたものと思われる。アセスの措置としての移植は55年10月に開始した。

筆者は環境アセスメントに自然環境部門で関与し、このハスカップの樹木実態調査では設計から現地の施工管理、そして基地内への8,000本移植、最後は市民や団体への分譲、全道の農協への分譲にひとりで携わった。この調査では、D・E地区で約15万本のハスカップが分布していることが判明し、いすゞ自動車の開発予定地だけでも約10万本が自生していることがわかった。市内の造園業者に発注したこの調査は、まさに人海戦術でカウントしたもので、カウントされたものはナンバリングされた。30cm前後の小さな個体は成木移植としては適さないとし、ナンバリングされていないものも多く見られたことから、実数は15万本よりさらに多かったものと考えた方が実情にあっていると思う。会社はハスカップを8,000本、同時に貴重植物になっていたエゾイソツツジ1000本も同時期に移植、移植地はつたもり山林の西側平坦地（のちの天皇の植樹会の北隣）であった。

苫東会社の「10年の歩み」では第3章の基盤整備等の「8.その他」でこの一連のいきさつが簡単に次のように記述されている。（原稿は筆者が用意したものだった）

「当基地内の各所に群生するハスカップは、スイカズラ科の落葉低木で、全道各地と本州の一部に分布するが、なかでも勇払原野とその周辺が最大であり、苫小牧、千歳などの住民にとって「ハスカップ摘み」と称する黒紫色の果実採取が初夏を飾る風物詩となっている。46年には苫小牧郷土文化研究会が苫小牧市及び市議会にハスカップの保護を要望しており、これを受けて苫小牧市は、小・中学校、公園等にハスカップ移植をはじめ、ハスカップ園の建設を行うなどハスカップの保護に努めてきた。

当社は植樹会の付帯工事として48年以降55年まで、継続的に工業用地予定地から緑地内へのハスカップ移植を実施してきたが、D地区の用地造成工事にあたり、工事に先立って希望者に分譲配付の案内をしたところ、申込みが全道各地から殺到し、その数は1市3町の住民より1,127件、各種団体から42件、地域外から192件に及ん

だ。

当社は 55 年秋にハスカップ 8,000 本（ほかにイソツツジ 1,000 本）を蔦森山林に移植するとともに、同時に希望者に分譲配付を行って D 地区内の約 37,000 本のハスカップを整理した。」

里子に出したハスカップ

ハスカップは、このように昭和 50 年代の半ば、いすゞ自動車の立地を機に保全と移植が盛んに行われた。基地内の移植はそれなりに可能な限り行われたが、残りは、基地外の二ーズに沿って「里子」に出された。内訳の最終実績はすでに紛失してしまって正確な数字は不明だが、大雑把な記憶では、市民に 2 万本、農協に 5 万本、そのほか、苫小牧市内の企業や学校などにも 100 本から数百本前後ずつ数千本近く、恐らく 1 万本が分譲されることになり、ブロックと掘り取り日を指定し現地での分譲に立ち会う日が続いた。

市民分譲への対応は慌しかったが、もっとも量の多いのが全道の農協関係で、地元の厚真、千歳などはもちろん、美唄市、大樹町、中富良野町、道東の標津、道北の士別からの応募もあったと記憶している。折からの減反政策の減反跡地に栽培するもので、果実の売り上げと減反補助の両面でプラスだったようだ。農協を通じて農家が栽培したハスカップは、肥培管理がなされ、実が大きく酸味がなく甘かった。

特に思い出すのは幌延町の男能富（だんのっぷ）小学校からのリクエストだった。当時の事業本部長だった A さんの口利きで送ることになったのだが、北海道新聞がハスカップ移植事業のシンボルとして取材することになり、約 100 本近くをコンパクトに積んだバンは留萌で一泊したあと、北上して無事小学生たちの待つ男能富小で引渡しと植え付けを済ませたことなどを、当時の北海道新聞は全道版で報道した。程なくして小学生からお礼の手紙が届いた。

また、市内では元代議士 N さんが庭にハスカップを植えたいという話が人づてに届いて、届けることになった。ハスカップはイチイやツツジなどと違って、美を競う園芸の上では評価は特にない。むしろ、立派な庭なら隅のほうに藪のように植えることの方が多いが、予想通り、N 氏の庭はハスカップのような無役の灌木が入り込むようなものではなかった。庭の入り口には富士山の石だと言う大きな岩が苔むしてガンと居座って芝もある和風庭園だった。N 氏に事情を話すと、「ま、それもそうだな」ということで、どこか端っこに仮植えしておいとしました。

3 . 苫小牧興発(株)の取り組み

地域ブランドづくりの試みの全容

今になって考えてみると、ハスカップは上述したように「地域資源活用」というオーソドックスなプロジェクトをベースに、「土地造成に伴う保全」の行為が重なって、あるいは織り込まれるようにして一つの時代を作ってきたように見える。そして今、新たに保全の課題が出てきているが、これは最後に、NPO 苫東環境コモンズが静かに取り組んでいるテーマとしてすこしだけ展望を述べることにしたい。

そのうえで苫小牧興発という子会社（以下、興発）の取り組みを思い出しながら概要を

まとめてみたい。興発も、親会社・苫東開発の植樹会に併せて直営の作業員が数百本ずつハスカップ移植を行っていた。目的は、ハスカップを原料とした想定できるあらゆるものへのチャレンジである。当時は生食も市場に出回っており、一つ目は生食用。これは保存が難しく担当者は苦慮していた。ふたつめはハスカップのジャムである。みつつめはハスカップのワイン、さらに4つめは挿し木苗作り。小さなポットに入れたハスカップの苗も小規模ながら販売した。筆者はそのいずれにも親会社の造園職として協力するよう命があり、いわば川上から川下まで、積極的に応援していた。

今になって思えば、ハスカップのプロジェクトは、勇払原野の地域資源・ハスカップを素材にして文字通りの勇払ブランドづくりに挑戦していたことになる。これらは、当時のA事業本部長のトップダウンで行われており、札幌千秋庵や小樽ワインの社長とA本部長のつながりに負っていた。ハスカップのプロジェクトが念のいったものだったと言えるのは、商標登録などのために国税に詳しい方もプロジェクトに関わっていたことでもわかる。商標登録はしかし全くうまくは進まなかった。それというのはある会社によって、ハスカップという名の付くありとあらゆるものが登録済みであり、ハスカップのジャム、ワインとも「ハスカップ」というキーワードが使えなかったのである。理不尽な話ではあるが仕方がなかった。結局、「勇払原野といえばハスカップ」という因果関係にすぎなくて「勇払ジャム」「勇払ワイン」という商品名になった。かなりマイナーなイメージに代わってしまうのが当時は残念だった。

一方、生食用の出荷は加工用として札幌の千秋庵がメインだったと記憶しているが、千秋庵は、勇払原野産にこだわり、ご指名だった。なぜかという、パティシエがよその産地、たとえば厚真や千歳、美唄など肥培管理された実ではハスカップ独特の酸味が乏しいというのである。霧が多く低温の勇払原野ではどうしても糖度があがらず甘み以外の食味が目立ってしまうらしい。逆に農業サイドで選抜されていくと恐らく粒が大きく、甘く、苦みの少ないものに収束していくのだろう。千秋庵側は「味はなにも甘いだけがいいとは限らない」という意外な評価であった。

そんな評判にわたしはなにか大事な部分をほめられたようで誇らしかったが、ただ糖度が低いと言うことには思わぬ落とし穴があった。ワインを醸造するにあたって勇払原野産のハスカップがもつ糖度の低さではアルコール発酵をしないことがわかったのである。小樽ワインではそのためなにか糖度を増す工夫をして醸造したはずだ。

このようにして地域ブランドの一角を示したかのように見えたハスカップ商品は、苫東視察のゲスト用などに親会社に買い取られたり、関係者の購入に支えられて10年近く続いたような気がする。しかし、ハスカップの採集から加工まですべて人力に頼ったハスカップジャムは本体業務との関わりのなかで次第に重荷になり撤退することになった。また、このような製品開発とマーケットに直結した商いは、かなり強いリーダーシップと思い入れがないと継続できないのも世の常で有り、Aさんというカリスマ性のあるリーダーが現場を離れた当時としてはこれもいたしかたない流れだっただろう。

ハスカップに関する研究

大群落を敷地内に擁し、地域資源を地域ブランドまで高めようという意気の長い取り組みが、苫東会社のもとで子会社・興発が中心になって進んでいったが、移植地をベースに

ジャムやワインを商品化し、挿し木苗も作り始めて一部は販売ルートにもものった。興発はこれらにあわせてハスカップに特化した総合的な研究を、王子製紙林木育種研究所の千葉茂所長をお願いした。記憶をたどると、特に栽培に関するものに重点を置いてはいるものの、いろいろなことが何もわかってはいない、そんな状態だったので、基本的なことから始められた。例えば、ハスカップの実の形状と食味の関係、実の重量と形状の関係、果実一個あたりの種子数、種子の発芽、挿し木苗の作り方、発根の土壌条件別差異などの基礎研究のほか、育種研究所らしく、遺伝子に関する調査も行われた。これもA本部長のご下命であり、この辺の担当もわたしのところへ飛んできた。

B4版横のペーパーに青焼きされた手書きレポートの内容は、研究所に何回かお邪魔して、千葉所長や担当の永田さん、飯塚さんに直接うかがった。たしか4年かそれ以上続いた研究で、原野の植生や苫東の緑化の植栽試験ですでお世話になっていた関係で、話は苫東の植生だけに関わらずさまざまなジャンルに及んで非常に有意義な勉強をさせていただいた。栗山育種研究所の手法は、手仕事でいろいろな実験器具を作ったり、まめに試験区を作って統計的な差を分析したりと、丁寧さに目を見張ったものだが、場合分けする際の視点も新鮮だった。例えば実生苗を作るに当たって、数種類の土壌を用いて種を蒔いたもの、実を埋めたものなどさまざまに条件を代えて結果を見るのだが、その中に、ただ指で押して埋めたものというのがあった。自然条件に近い物理的な播種状態に当たる。

平成10年代の半ば、NPOをつくる際の柱のひとつはハスカップだと考えていたわたしは、ハスカップのこの研究を思い出して、活字にしておこうと考え、苫東新会社へ照会し、何度か、旧会社時代に自分が残したはずの資料を探させてもらった。しかし、ホコリっぽいプレハブの2階に数回お邪魔したにもかかわらず、結局、見つからなかった。興発の関係者も不明で、一昨年、平成22年、往時の担当者であった王子の永田さんと偶然札幌でお会いして消息を聞いたが、研究所の閉鎖の際にすべてが運び出されて行方不明、飯塚さんも研究所に保管したままだったから、持ち合わせはなかった。ハスカップに関する実態調査の資料も同じである。経営破たん、ドサクサで捨てられてしまったらしいが、うらめしいこと限りない。

ハスカップジャムのラベル

いささか絵心があつたらしいわたしは、A本部長から、子会社の苫小牧興発のハスカップジャム事業を応援するように言われたその一環で、ジャムのラベルの試作を繰り返した。その基になるハスカップの構図を得るために、早朝や霧の日など、美しい画像が得られそうな日を選んでハスカップの原野に赴き、実にたくさんの画像を納めた。山関係の先輩で苫小牧でDPEの仕事をしてきたカメラマン中村千尋氏にもお願いしていろいろな構図を収集した。そのなかから、もっともハスカップがハスカップらしく見え、物語性もおとってくる構図というものを探っていった。実はそれまで、ハスカッ



プの図案化は、三つ星さんのものもさほど見るべきものがなく、もちろん典型的な図案はなかったのである。

そうこうしているうちに、やっと簡単な図案に仕立てられるということがわかってきた。上のパッケージなどがそうである。このそれらしさは、葉が対生で、腋から4つの実が出て時々3つになったり2つになったりするというハスカップの特徴をつかんだ上で描きあげないとデフォルメもできないのである。そこによやくたどり着いて、もっともハスカップらしいものができあがった。4面がつながったこの図案は、ハスカップの原野でハスカップに囲まれながら写真を撮りまくっていた頃の雰囲気再現したものである。残念ながらそのうちで最も秀逸なバージョンが今手元にはなく、さらに困ったことに、著作権もななあで済ましており、そうこうしているうちに子会社は消滅してしまった。



ただ、変なところに残っていた。一つは新会社・苫東の看板。端っこにハスカップの絵が描かれている。これはわたしのカットであるが、作者には特に連絡はないまま既得権のように使われているようだ。ひどいのは、市内の緑道の車止めに使われているカット。これは完全に盗作というか、著作権侵害である。



豊川の緑道のカットと看板に挿入された図。

また、三つ星さんは、わたしが一番上の、パノラマのハスカップをデザイン化したとき、数ヶ月後に同じような色合いとデザインの六角形か八角形のパッケージでハスカップジャム商品を出した。わたしは、ああ、真似されたと、内心嬉しかった。さらにそのころ、JR苫小牧駅の構内に葉っぱが2枚、実が二つのハスカップのデザインが壁画的なカットとして何枚か描かれるようになり今も残っている。これもわたしは見覚えのある構図である。恐らく、わたしが興発のジャムで作り出していったハスカップの図案は、別のクリエイターやジャム関係者に、図案のさらなる図案化のヒントを提供したのではないかと密かに考えている。

4. ハスカップのエピソード

ハスカップは虫媒花なのか

また、おもしろいエピソードがあったのは、ワインの残渣である。ワインを絞ったかすは皮とタネである。そのハスカップの実本体には、たしか数十個のタネがあり、ワインの残渣は何十万、何百万という種子の塊であるはずだった。これを思いついて2年目頃から引き取ることにした。一旦水にとかし、皮とタネに分離してタネだけを取り出し培土に播いてみると、80%近い発芽率だった。また、水に溶かさないうでそのまま培土に埋めても発芽した。しかし、翌々年だったかは全く発芽しなかった。これは何を意味するのか。普通に考えれば、受粉していないからだと言える。あるときは高い確率で受粉し、あるときはそうでないという落差が当たり前なのかはわからなかった。

そもそもハスカップは虫媒花なのか、風媒花なのか、それがどうもよくわからない。昼日中、昆虫が花卉に潜っているのをほとんど見たことがなかったからだ。たまにマルハナバチが潜って花卉を八つ裂きをしているのを見るのがあったがせいぜいその程度だった。昆虫に詳しいある方に聞くと、それは夜間に蛾が媒介しているかもしれない、というので開花時期、夜のハスカップ畑で観察してみたが蛾らしいものは発見できなかった。結局、わたしには不明のままだ。

いすゞとハスカップの因縁

ハスカップの最も大きな群生地は苦東計画のD地区に当たる。いすゞ自動車は現在地に進出したのは、このD地区が自動車関連用地に位置づけられていたからである。たとえばトヨタ自動車でも日産でも可能性はあったのだから、いすゞとD地区に特に因縁めいたものはない。しかし、あのとき妙なことに気がつき、わたしはやはり因縁があるのではないかと思うようになった。それは立地したいすゞは「ジェミニ」という小型のセダンを量産し始めたのである。ジェミニは日本語では双子座という星座名である。ハスカップはしばしば、あるいはほとんどの場合、葉っぱの付け根（葉腋）に双子のような実をつけるのである。「ふたつ」にまつわるのはそればかりでなく、一つの実を横断すればわかるが、1個の実がふたつの実がくっついてできているのである。属名のヒョウタンボク属というのもそこから来ている。ハスカップのそばでよく見かけるベニバナヒョウタンボクもそうだが、1個の実がひょうたんのようにふたつが合体している。簡単に言うと、葉の付け根には2個ずつの花が片側1, 2対（つまり2個～4個）ついて、結果的には図のように、実が片側1個か2個になる。1個が落ちて見た目では3個と言うことも多い。花の咲く時期から実がなるまで観察していると、この意味はよくわかる。

双子のような花と実のハスカップ自生地、そこに双子座を意味するジェミニを生産する工場が建った。わたしは密かにこの巡り合わせに有頂天になって、いすゞ苦小牧工場を「ハスカップ工場」と呼んだらどうかと関係者に提言したのだが、これも全くそのような動きには至らなかった。

いまわの際に恋われたハスカップの塩漬け

エピソードのようなものを書き始めるといろいろなことが思い出されてくる。食味で思

い出したのは、まず天皇陛下である。昭和天皇は、昭和 40 年代だったと思われるが、王子製紙の栗山の研究所を訪問されたとき、時の千葉茂所長はデザートに夕張メロンとハスカップを出されたという。昭和天皇は迷わずハスカップ（たしか砂糖をかけたものと記憶する）を所望されたという。これは千葉所長に後日談として伺ったことである。

食味のもう一つは、ハスカップの塩漬けである。これは上厚真の S さん宅でいただいたのが最初だった。地元の方にはとりわけ風土色の豊かな食べ物といえ、おにぎりに入れたりするから、梅のない勇払原野あたりでは梅干しの代用としていたようだ。日の丸弁当の真ん中に入れるとまさに梅干しのそれと見分けが付かないが、酸味が強いのかアルマイトの弁当のふたが溶けるのだ、と S さんは言っていた。また、知人のおばあさんが亡くなる前、家族がおばあさんになにか食べたいものがないか聞くと、「ハスカップの塩漬けが欲しい」というので用意して与えたら、さも満足したようににこやかな顔をして息を引き取ったという。風味なのか土着性なのか。ひょっとすると胆振の勇払原野の開拓などに関わった人々にとって、ハスカップの塩漬けはソールフードなのではなかったのかとも想像した。

この頃になって、筆者も塩漬けやシソ漬けを漬けるようになった。そこでわかったことだが、ハスカップは口の中をリフレッシュさせるときには格好の材料だと言うことである。舌の上へのせ、かんでみるとシュワーっと広がる独特の酸味、苦み、渋み、それらが、口中の不快感を一掃してくれるのである。人生の最後において、ハスカップの塩漬けを食べたいとリクエストしたおばあさんの本心は、あるいは闘病で大分不具合を来したかもしれない口中を、勇払の風のように拭き清めたかったのではないか。

湿原のスピリチャリティ

ハスカップの塩漬けがソールフードではないか、と書いたついでにもうひとつ不思議な体験を書いておきたい。恐らく昭和年代の後半、わたしはいすゞ自動車の土地造成に伴う環境アセスメントの追跡調査をしていたころである。調査の要点は開発によるいすゞ南側の湿原の環境変化をしらべるもので、いすゞ自動車の工場南側の道路用地からほぼ直角に 1500m ほどのラインを海に向かって張り、その両側に出現する種を記録して経年の植生変化をみていくものだった。土地造成を始めた頃から、数年、毎年一回、C 地区と呼ばれていた湿原に単身入り込んで数日、びっしりと種を野帳に書き込み、わからない種は袋につめて持ち帰って調べた。いつもたった一人の、とても寂しい調査だった。

そうしたある日、ヨシ・イワノガリヤス群落の真っ只中でたっていると、そこを吹きぬける風がリコーダーのように感じられた時だった。この今いる湿原とそれを取り巻く植生、柏原という原野、それらに土地の神々の気配がしたのである。樽前山神社は山と森と原野の神々を祀っているものと聞くが、その中の森と原野の身近な神々ということになるのだろう、確かに土地には神がついていて土地と一帯になっている感覚だった。氏神さまである。別の表現で産土（うぶすな）⁵と呼ぶものだ。

どうしてそのような感覚になったのか。自然の畏れの湿原版というところだろうか、わ

⁵ 産土（うぶすな）；=産土神。「神道において、その者が生まれた土地の守護神を指す。その者を生まれる前から死んだ後まで守護する神とされており、他所に移住しても一生を通じ守護してくれると信じられている。」（ウィキペディア）

わたしには初めての感覚だった。山々や森林や海に感じた自然とひとり向き合ったときの敬虔で崇高な祈りのようなあるもの。それをわたしは初めて湿原に感じ取った。数千年数万年前は海だったという一帯の地質年代を思い起こしながら、開拓に入った人たちの労苦を偲んだ。

余談になるが、わたしは近年、人間の最高の幸福は何かときかれたら、土地とのつながり、と答えたい。土地の産土に守られているという感覚を覚えると、人は自分が今息づき愛着をもって暮らしているその土地と自分がつながっていると感じることで「ひとり」になり、本当の自分を知るのである。雑木林の小屋に泊まって早朝冥想するときなどがそれである。

5.まとめ ~ハスカップの後見人とサンクチュアリ~

ハスカップの後見人

NPO設立時の事業の一つにハスカップ保全をすえてから、地元の方々の動きを含めたハスカップを取り巻く現状を観察、勘案してわかってきたことは、今、ハスカップにはかつての苦東のように、複数の関係者で現状と将来的に確に捉え対策や展望を語れる後見人に相当するものがないということであった。

不動産業としては原野はお金に替わるフローであるけれども、不動産業の旧苦東は、もうひとつ、地域開発というミッションを明確にもって



ハスカップ摘みの収穫に喜ぶ

動いていた。その延長で、郷土種ハスカップを保全し、新しい地域ブランドの創り手兼守り手、まさに後見人的であった。一部のメディアはかつて苦東プロジェクトという地域開発が「大企業優先」「公害垂れ流し」になるというレッテルを地域開発に貼って、少なくない市民道民がその見方に賛同してきた。しかし今はどうだろう。経営破たんした苦東会社と、北海道経済を支える苦小牧という地の利、ゆるがない製造業と港の流通機能を相殺して、あまりあるものを北海道に残しているのではないか。その検証、事後評価が行われてきたように思えない。これは不幸である。

話はハスカップに戻ると、ハスカップはやはり勇払原野という風土のひとつのシンボルである。風土は、土地を分譲して付加価値の高い産業空間を作っていくというフローからはみ出る。経済だけでは扱いきれない環境やコミュニティに親和性の強い、いわば社会的共通資本として存在していると思う。それはよほど高いミッションでも持たないと経済的なサポートはできない。ハスカップに後見人がいないことがわかってから、わたしはこのからくりによろやく気づくことが



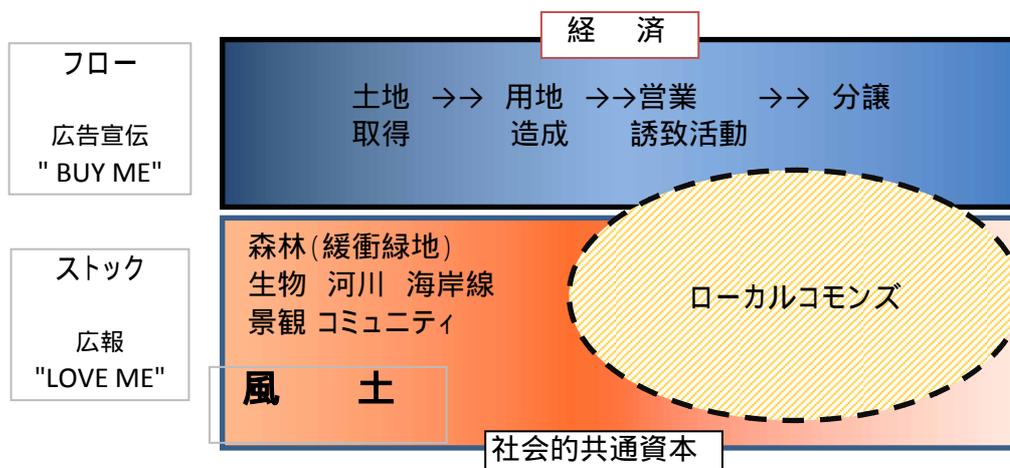
たわわに実るハスカップ

「ローカルコモンズ」と「ハスカップ・イニシアチブ」

勇払原野という風土は、経済の外の、地域が共有するローカルコモンズ⁶なのである（下図参照）。経済は風土の上に成り立っているのではないか、というのが昨今の私的仮説である。ローカルコモンズは風土の方に親和性が強い。その風土のシンボルであるハスカップも地域住民が共有する財産のひとつであったのである。その去就については、この風土に強い愛着をもち、ハスカップ摘みなどのアウトドアの時間が四季の重要な営みになっているような人しか、持続的な保全の動機を持ち得ないのではないか。後見人が不在になってきた背景をわたしはこのように読み取ってきたのだった。

NPO 苫東環境コモンズというローカルグループが、コモンズ（ローカルコモンズ）という概念を掲げて、苫東というエリアだけを対象にして、ミズナラ・コナラ林とハスカップの持続的保全に取り組み始めた理由もそこにあった。ただ、NPO は運動論にあまり足を踏み入れない。風土の面影を残しながら、風土の重層的な利活用にアタマを悩ませ自ら持続の担い手になること目指している。荒廃してきた里山的な雑木林とハスカップをもっと知り発信し、B級自然・勇払原野のファンを少しずつ増やして行きたい。地域の共有財産ローカルコモンズはそんな地道な取り組みで遅々としつつも、解決の道を探していけるのではないか。

経済と風土、ローカルコモンズの関係図



(筆者作成)

わたしはここ一年ほどの間、「ハスカップ・イニシアチブ」というアイデアを温めてきて、このあとがきを書きながら、ようやくこれを活字にしてみようと思いついた。イニシアチブとは従来「主導権」のように訳されてきたが、ここでは「まだ誰も手をつけていな

⁶ ローカルコモンズ；大気や海洋、熱帯雨林などグローバルコモンズに対して、地域に根ざしたコモンズをローカルコモンズと呼ぶ。フリーアクセスのゆるい関係性の場合と、地域コミュニティのメンバーに利用が限定される場合がある。苫東環境コモンズは前者に当たる。

い戦略」みたいなものである。経済からはずれた郷土のローカルコモンズを、苫小牧に極めて薄くなってしまった「郷土愛」でまとめてみよう、というものである。ハスカップはその象徴である。この稿の最後に「郷土愛」などという情緒的なキーワードを持ち出すことになったが、勇払原野こそ、フローの土地という性格と、さまざまな開発反対運動の余韻が、いつしか一般の市民の郷土愛までブレーキをかけてきた感がわたしにはするのである。このようなからくりをひもとして、ハスカップを真ん中において新しい郷土愛を育むことができるか、と思うのである。

この稿は、勇払原野とハスカップ保全の経緯を振り返り、自ら立ち位置を再確認するために書き始めたものであった。さしあたって、1970年代のハスカップの現状については数々の自然環境調査で明らかにされており、昨今は遊水池の計画の検討資料としてハスカップの分布について、かなり専門的に調査されているように聞いている。この間の、40年間の調査のほとんどは前述の通りほとんど失われたが、これは潔くあきらめて、これからのハスカップのことをサンクチュアリやイニシアチブという視点で考えていこうと思う。



ハスカップ原生地に 2012 年サンクチュアリを設けた

(おわり)